

# 女性のアイデンティティの確立と社会力の構築 —人生の樹をどう育てるか—

春日 美奈子（子ども心理学科・教授）・大野 和男（児童学科・准教授）

## I. 研究の目的

1986年（昭和61年）4月1日に施行された男女雇用機会均等法によって女性の社会進出が促進され、その後、幾たびかの法制度の整備により女性の就業・環境は整備されてきた。安部政権は、アベノミクスの成長戦略で「女性の活躍・推進」を今後の成長の柱と位置づけていることから、女性が社会で活躍する道は確実に広がり、人生の選択肢は一昔前に比べて格段に広がりを見せている。生き方の選択肢の増加に対して、個人の主体性がともない各人の行動規範の質が問われるようになった。社会進出にともない女性の意識もそれにしっかりと対応できる能力が必要になる。自由社会において、各人の中に体系的・内在的に確立された行動規範がある。自分がとった行動についての結果は、本人自らその責任を負わなければならない。与えられた権利には、必ず責任が付くことを忘れてはならない。女性は一人の人間として立つと共にやがて親になる可能性を持つ、子どもにとって親の存在は大きい。母親の愛情と養育は、子どもの基本的な安心感や社会性の土台となる力を養う上で決定的な役割を果たす。それゆえに女性の人間としての成熟が必要になる。

人の成長は、木の成長とも似ている。一本の樹が多くの年輪を刻むには、大地にしっかりと根を張りいかなる状況においても揺らぐことなく自分の道を貫く一本の筋の通った精神が必要であり、それは人格に繋がるものでもある。女性の生涯発達においてもどのような自分の根幹をしっかりと据え樹を育てていくかが重要になる。

そこで、日本において隔世の感のある中で、女性が自立して仕事をもつことが大変だった時代、女性たちがいかに時代を切り開き自分の道を歩んでいったのか、各分野の第一線で活躍された先達の軌跡を追うことによって、現代女性のアイデンティティの確立と社会力における女性の知的自立と知的雇用能力の獲得を検討する。そのことによって、現代女性の生き方について、示唆を与える切っ掛けとしたい。

## II. 研究の進捗状況

自由社会といわれる現代にほど遠い時代の中で、自由社会としてあるべき人間の行動を選んだ女性たち。その先達たちの軌跡には、逆境を乗り越え、自分の行動規範を根底に自分で臆せず道を切り開き自分らしく生きた数々の足跡が残されている。

先行研究として昨年は、明治・大正・昭和・平成の時代を色濃く生き抜き104歳で亡くなられた我が国における女性解放の先駆者・加藤シヅエ、そして大正から昭和にかけて活躍した歌人の柳原白蓮の人生の軌跡を追いながらそれぞれの人生の樹の構築過程と分岐点の分析を試みた。戦前の家制度における権威構造は、男性主導の一心同体規範を生み出し、女性にとっては生きづらい時代でもあった。その時代の真っ只中で、加藤も白蓮も時代の波に飲み込まれず果敢に生き抜き、その姿は、今なお生き続け、後世に人生観として指針

を与え続ける要素を含んでいる。これに続き今年度は、四人の先達の軌跡を辿り、先達の生涯における発達過程と分岐点を文献・面接調査を取り入れながら分析し、これを中間報告とする。

【分担；春日美奈子】

### Ⅲ、先達女性の生涯における発達過程と分岐点

#### (1) 石井ふく子（1926－至現在）の人生の樹

【分担：春日美奈子】

TBS『東芝日曜劇場』のプロデューサーとして「女と味噌汁」「女たちの忠臣蔵」「カミさんと私」などの名作のほか、「肝っ玉かあさん」「ありがとう」など数々のホームドラマのヒット作を生み家族の温もりを伝え続けてきた。中でも、「渡る世間は鬼ばかり」は20年にも及ぶ長寿番組となった。1989年、紫綬褒章を受章。2014年には、「世界最高齢の現役テレビプロデューサー」として、また15年には「最多舞台演出本数」でギネス記録に認定されている。穏やかな優しい雰囲気の中に、時代の流れや時代感覚を読み取る鋭い感性を持ち、女性の視点から見た、新しい価値観や人間関係のあり方などに敏感で感覚や感性を大切にしながら、プロデューサーという厳しい世界を生き抜き多くの作品と多くの俳優を生み出しそして育ててきた。その人生に休憩はなく、89歳となった今も次の作品に向けて全力で走り続けている。

#### <人生の樹の構築過程と分岐点>

大正15年（1926）年9月1日、東京下谷区数奇屋町生まれ。父は新派の名優・伊志井寛。母は小唄の家元・三升延。東京女子経済専門学校（現・東京文化学園）卒業後、新東宝に入り女優を志すも身体を壊し断念、日本電建宣伝部に勤務。会社がテレビドラマのスポンサーになったことから、TBSとのつながりが生まれ『東芝日曜劇場』の制作にも囑託として関わり、昭和36年に退社後、正式にTBSに入社。昭和49年、TBSを退社、専属プロデューサーとしてTBSと契約を結んだ後も、敏腕プロデューサーとして数々のヒット作を生み続けている。その間、昭和43年からは舞台の演出・企画も手がけ「最多舞台演出本数」でギネス記録に認定されている。

一出生にはお母様の深い愛情が込められていたということですが。

「父と母の結婚は、周囲の反対があったせいで、母は未婚のまま私を産みました。母が私を産んだのは、大正15年9月1日。暦の上では「天一天上」といって、この日に生まれた子は一生困らない、ある徳を身につけるといわれ、良運にめぐまれて育つように、わざわざ9月1日に帝王切開で私を産みました。母は、自由奔放な人で、母親になっても自分は自分のために人生を生きるだろう、そんな母が子どもにできることは、最上の日に産んでやることしかないと考えたらしいのです。当時はまだ危険な手術でしたが、母親としての一生分の責任は、あの時先払いしたのって」。

一数々のホームドラマを生んでこられました。原点はなんですか。

「親子らしい触れ合いをあまり味わうことがなかった特殊な環境で育ったせいか、普通の家族への憧れがありました。それがホームドラマの原点でしょう。ドラマを通じて、何気ない家族の日常の中で人間が持っている思いやりや家族の温もりを伝えたいと思ってきました」。

石井は、親子であっても、つねにけじめをつけ、甘えたくとも心を隠しながら甘えるこ

となく生きてきた。親子らしい触れ合いをあまり味わうことのなかった母と娘、しかし不器用な形で子を思う母の愛は、石井ふく子という日本を代表する名プロデューサーという大きな木の芽を生み出した。その木の芽が大きな樹となるまでには数々の分岐点があった。

出生、日本舞踊との出会いと挫折、戦争と勤労動員・代用教員時代、新東宝女優時代、日本電建宣伝部時代、TBS入社、結婚と離婚、そして遺産問題とTBSの専属プロデューサーとしての現代までにおける89年という年月には様々な波があり岐路があった。その中で、もっとも大きな人生の転機というべき時期がある。石井32歳の時である。

日本電建の宣伝部に採用され、そのとき手がけていたラジオドラマがきっかけとなり、TBSにプロデューサーとして入社。『東芝日曜劇場』を手がけ、「肝っ玉かあさん」などのホームドラマを数多く生み出すこととなった。35歳のときに日本電建を退社し、正式にTBSの社員となった。その頃の心の中を石井は次のように述べている。「人は誰でも人生を大きく変えてしまうような岐路に立つ瞬間がある。それもたいてい何の前触れもなく突然立たされるのである。しかし、どんな格好で訪れるのかが問題なのではない。そのときどう対処するかが問題なのだ。やりたいことが私の中でちゃんと形になっていたことが強みだった」（石井、1993）。大きな転機を見極めて逃さなかったという確信は、その後の人生の大きな支えとなり自信となった。そのことが石井という樹を根底から支える強い根となっている。

#### <石井ふく子の精神のルーツ>

8つの分岐点を想定し、石井ふく子の人生を検討した。人にはそれぞれの人生において、もっとも大きな意味を持つ人生の転機というべき時期がある。石井にとっての転機は、今なお恩師と慕う諏訪博（元TBS会長）との32歳の時の出会いである。この出会いが、名プロデューサーとして確かな道をつかむ切っ掛けとなった。89歳まで歩む道程には、小さい岐路も大きな岐路も数多くあった。それを乗り越えてこられたのは、幼少期の家庭環境の中で自然と育くまざるをえなかった自立心である。70歳になるまでどんなささいなことでも娘に頼らないで生きることを守り続け、しつけには厳しかった明治生まれの気丈な母。お互いを思い、愛しあっても、一緒に過ごす時間が少なかったことから愛しているのに不器用な表現しかできない親子。すぐに求めても得られない母の愛を、幼い自分の心に封じ込め恋しい気持ちを抑えながら一人で立てるように努力してきた姿がある。石井という太い樹の根幹には、孤独と寂しさから抜け出すために幼少期から青年期にかけて早く一人の人間として立てるように努力した足跡が見られる。

人に恵まれて育つようと「天一天上」の日に命がけで生んでくれた母の深い愛が、89歳となった今も、多くの人に囲まれながら現役の名プロデューサーとして「焦らず、怒らず、あきらめず」の精神を大切にしながら走り続ける原動力となっている。石井ふく子89歳、絶えず先を見据えながら精力的に仕事に取り組むその姿は、若い世代に「学んで老いず」の精神を無言で伝え続けている。

#### (2) 野口シカ（野口英世の母1853—1918）の人生の樹

野口シカは、大正時代の細菌学者野口英世の母である。極貧の農家に生まれ、祖父、両親が相次いで家を出てしまったため、信心深い祖母の手一つで育てられた。7歳で農家に

雇われ、終日子守や野良仕事に追われ、辛苦を重ねつつも逆境を耐え抜き、息子清作を見事学問で立たせ、世界の野口英世に育て上げた先達である。貧しさの中、幼少期から丁稚奉公に従事していたため、満足に文字の読み書きができなかったシカ。1歳の時に囲炉裏に落ちて大やけどを負い、左手の働きを奪われた英世のために、極貧の中でも息子の人生を見捨てず、学問で立たせるため、昼夜身を粉にして働き続けた。昼は、畑仕事をし、夜は子どもたちを寝かしつけた後、近くの川でエビなどを採り、翌朝それを売りに歩くという人間の能力として極限といえるほどの努力を惜しまない人であった。そこには、自分の不注意からおきた事故に対する自責と使命感が、息子のために自分の人生を生きることを決心させたものであり、青年期以降からその後の全生涯を貫いて走っている。わが子に対する限りない深い母の慈愛は、いかなる貧苦にも屈することなく、生活のために血の汗を流して働くことが人生だったシカにとって、英世は夢であり希望でもあった。その英世の人生に自分の人生を重ね合わせながら一心同体で歩んできた生涯でもある。まさにこの母ありてこの息子ありである。シカを通して日本女性の底力と母性の使命の尊厳を知ることが、これからの女子教育に多くの指針を与えるものである。

#### <人生の樹の構築過程と分岐点>

1853年9月16日に、福島県耶麻郡翁島村三城瀧に集落の中でも貧しいの農家の長女として生まれる。父善之助と母ミサは夫婦仲が悪く、相次いで家を出てしまい、幼いシカは祖母の手で育てられたが、その祖母はシカが10歳の時に亡くなり一人ぼっちで生きなければならなくなった。シカは貧しい生活の中にあっても生前祖母が行っていた「観音信仰」と、「苦しいことも耐え忍べば、必ず新しい道が開ける」というこの二つのことだけをいつも心に刻みつけて生きてきた。66歳という短い生涯には、多くの波となる分岐点があるが、みな苦労の連続ばかりであった。シカにとっての分岐点は、極貧と両親の家出による生育史環境からすでに幼少期から始まっている。わずか7歳の肩に家の生活がかかっていた。自分の夢など持てない中で、忍耐と責任感はこの頃から育まれている。数々の分岐点があるなかで、シカにとって生涯をかける分岐点となったのが、息子清作（後の英世）の左手の大やけどである。この日を境にハンディを持つ息子を学問で立たせるための使命感が青年期以降からその後の全生涯を貫いて走り抜けている。

#### <野口シカの精神的ルーツ>

出生から辛苦という二文字を背負いながら生きざる負えない宿命を抱え、両親の愛情も受けられないまま辛苦を重ねつつも逆境を耐え抜き、労働体験から得た、一つ一つの苦労を自己の血肉として育み、気丈な意志の強い女性として成長してきた。その根底には、見えない大きな存在への畏敬の念と感謝の気持ちを、どんな時にも忘れることなく持ち続け、その守りの中で、鉄の如き意志と無限の慈愛を持ち、越えられない峠も乗り越え、二人の子どもの母として愛児の奮起を支え続けてきた。信仰は生きるうえで大きな源でもあり、シカという樹を支えるぶれない一本の金筋でもあった。

シカのエピソードとして今も語り継がれていることがある。無学であったシカは、貧困であったためお盆の上に灰を乗せ、その上をなぞって文字の勉強をしたり、囲炉裏の灰に指で字を書く練習をして、アメリカにいる英世に一目会いたい一心で平がなで一生懸命書



き綴った手紙を英世に送っている。その手紙は今も福島県の野口英世記館に残され、訪れる人達の涙をさそっている。子を思う母の気持ちは、何にも増して偉大ものである。

### 参考文献

- 石井ふく子 1993 『お蔭さまで』  
木下英治 1995 『石井ふく子 おんなの学校』  
野口英世記念会 1959 『野口博士とその母』  
田中章義 2014 『野口英世の母 シカ』

### (3) 澤田美喜 (1901-1980) の人生の樹

【分担：大野和男】

明治34年9月19日に、三菱財閥の3代目当主・岩崎久弥の長女として誕生した。3人の兄がおり、初めての女の子ということで、岩崎家では、その誕生をことのほか喜んだらしい。5歳の頃、兄たちが自宅で英語を学んでいた縁で、津田梅子と出会っている。母寧子の勧めもあり、語学、そして外国への関心を高めていく。6歳になると、東京女子高等師範学校附属幼稚園、そして、附属小学校、15歳で東京女子高等師範附属女学校（現在のお茶の水大学）に入学する。この時期に、厳格なしつけを受けた岩崎家の令嬢という生まれを超えて、誰とでも仲良くなりたいという気持ちが強く持つようになる（盛，2009）。16歳の時、静養のために訪れた大磯の別荘にて、付き添いの看護婦が読んでいた聖書をきっかけとして、キリスト教と出会う。このキリスト教かぶれは、学校の影響とされ、学校を退学させられることになってしまった。結婚に関して、縁談相手に選ばれたのが外交官の澤田健三であった。彼は、キリスト教と外国生活にあこがれる澤田にとって2つの夢が一挙に叶うチャンスであった。22歳での結婚を機に、キリスト教に改宗した。結婚後、ブエノスアイレス、北京、ロンドン、パリ、ニューヨークへ随行し、その間に3男1女の母になる。ロンドン在中時、郊外にある「ドクター・バナードス・ホーム」という孤児院を訪ねる機会があった。その施設や環境、明るい孤児たちに接して感動し、そこでの奉仕活動が澤田の生活に充実感をもたらした。また、フランス在中時には、生涯の友人であるジョセフィン・ベーカーと出会う。ベーカーは、黒人と白人の間の混血女性であり、世界的なエンターティナーであるにもかかわらず、言われなく差別を受けていたため、社会的弱者救済の活動に携わっていた。後年、澤田がエリザベス・サンダース・ホームを設立したときに、寄付をしたり、ホームの子どもを養子にしたりという形で関わることになる。

占領軍司令部が設置され、進駐軍が日本を占領したのは、昭和20年のことであるが、占領軍の男性と日本人女性との間に混血児が誕生し始める。混血児は、望まれて生まれてきた子どもばかりではなかった。そんな中、澤田は、混血児と決定的な出会いをする。東京行きの夜行列車の中で、網棚から風呂敷包みが落ちてきた。その中身は、黒い肌の乳児の死体であった。澤田は、警察から疑われたが、周囲の証言で母親ではないことが証明された。この出来事について澤田は、神の啓示を受けたとし、次のように語っている。

「もしおまえが、たとえいつときでもこの子の母とされたのなら、なぜ、日本国中の、こうした子どもたちのために、その母になってやれないのか」。この啓示が、私の残る余生をこの仕事にささげつくす決心を、はっきりさせた瞬間でした（澤田，1980）。先に述べ

たとおり、イギリスのセント・バーナード・ホームを訪れたときに、いつかは孤児のための活動をしたいと決意してから18年目に、生涯をかけた混血児教育へ乗り出していく。

混血児救済事業を始めるに当たって、理解者が少ない中、澤田の父と夫は、理解を示した。大磯の別荘を使用しようと考えたが、当時、政府に財産税として物納していたため使用ができなかった。澤田は、占領軍司令部に直談判に行き、2人の混血児を迎えて混血児の母としての第一歩が始まった。この大磯の別荘は、澤田の事業に初の寄付をしたイギリス人女性の名にちなんで、「エリザベス・サンダース・ホーム」と名づけられた。

混血児の保護を始めると、日本人からは、財閥娘の道楽であるとか、別荘が惜しくてホームを始めたなど、言われなき中傷を受けたり、混血児の母親からは、ホームがあるのは自分たちのおかげと言われたそうである。日本人だけでなく、占領軍の男性の性行動の結果である混血児の存在を表沙汰にしたくなかった占領軍からも、ホームの活動に圧力をかけられる。そんな中、占領軍兵士や日本人の中にも陰ながら援助をしてくれるようになっていった。澤田は、日本における混血児の現状を訴えるため、そして養子縁組の法律の改定を求めるため、アメリカ公演を11年に渡って行っている。混血児が就学年齢に達すると、その教育場所を巡って、再び混血児問題が再熱した。日本政府は、混血児も日本人であるので、日本の小学校で学ぶべきという同化教育の立場をとった。しかし、ホームのある大磯の小学校の保護者たちは、それを嫌がった。そこで、澤田は、教育施設を設立した。それが聖ステパノ学園である。この隔離教育に関しても、様々な非難を受けた。このような様々な苦難を乗り越え、混血児教育を成し遂げた。澤田の偉業は、アメリカのブラックウェル賞や首相顕彰、勲二等瑞宝章という形で国内外にて高く評価されている。

#### <澤田美喜の精神的ルーツ>

5つの分岐点を想定し、澤田美喜の人生を検討した。幼少期から、当時の横綱梅ヶ谷に例えられたくらい力と健康を兼ね備えたバイタリティの持ち主であった。澤田の人生の中で、特に重要な意味があったのは幼少時期の海外への憧れとキリスト教に出会ったこと、そして、混血児と決定的な出会いをしたことがエリザベス・サンダース・ホーム設立につながっていると言える。澤田自身も、「信仰半分、意地半分」と述べているように、元々備えていた精神力とキリスト教への信仰というものが、彼女の偉業を支えていたのであろう。

#### (4) 山口宗悦(山口悦子)(茶道家)の人生の樹

平成27年5月26日に面接を行った。山口は、現役の茶道家(裏千家名誉師範)である。大学・高校茶道など、地域貢献を行っている。「ポーランドにおける日本文化の普及」に貢献したとして、平成27年度外務大臣表彰を受けている。ポーランドのクラクフ市からも勲章「ホノリスグラティエ」を授けられた。生まれながらに、身体が弱く、結婚しても子どもを持つのは無理ではないかと言われたそうである。きょうだいの真ん中のせいか、「ゆるゆる」と育った。茶道は7歳から始めたそうである。茶道の他に、琴と三味線も学んでいる。日立の技術者としてポーランドに赴任していた夫の縁で、ポーランドに茶道を広めていくことになる。ポーランドには、40年に渡って年に2度ほど訪れている。現在80歳を超えているが、ポーランドでは、ホームステイをしているそうである。面接においても、

語る内容の多くは、ポーランドのことであった。山口曰く、「後世のために何か残したい。今後も優秀な人をあちらに紹介し、日本では子どもたちにポーランドの良さを紹介するのが私の務め」という。それだけ、山口の人生において、ポーランドにおける茶道というのは重要な意味を持っていると思われた。

#### <山口宗悦の精神的ルーツ>

彼女に影響を与えたのは、母親のようである。「続けていくことの大切さ」を挙げている。これは、母親の影響であるという。その教え通り、茶道はもちろん、琴、三味線なども、その道を究めている。非常に肯定的志向が強い方で、「苦勞というのではない」と言う。周囲の方とのつきあいが重要であるという。本人曰く、「自慢をする人とか、自然と抜けちゃう」。日本においても、ポーランドにおいても、今つきあいのある人は「いい人ばかり」だという。山口は、人の関わりということを重視しているが、それは茶道の心でもある。茶道、そして、人生の中の重要なことばとして、「余情残心」を挙げている。お茶は総合的な芸術であり、1つ1つを覚え、そこに気持ちを込めることが重要であるという。

彼女の人生の中で、現状を受け入れ、悪いことはあまり考えないということが、肯定的志向が80歳を過ぎた今でも定期的にポーランドを訪れ、茶道に携わるバイタリティを持ち続けられる原動力になっているのではないだろうか。

#### 参考文献

- 盛香織 2009 「第9章 澤田美喜—混血児の母として生きて」（植木武（編）『国際社会で活躍した日本人—明治～昭和13人のコスモポリタン』弘文堂
- 澤田美喜 1980 『黒い肌と白い心：エリザベス・サンダース・ホームへの道』ほるぶ社
- 澤田美喜 1980 『母と子の絆—エリザベス・サンダース・ホームの三十年』PHP 研究所

#### 3. 考察及び今後の課題

【分担：春日美奈子】

人間の一生は時間と空間の制約を免れることはできない。歴史という時間軸と文化という空間軸のなかに無限の人々の人生が存在している。時代という大きな波の中で、全身全霊をかけて生きることに真摯に取り組んできた先達の姿には、凜とした美しさと力強さがある。時代の風波の中、出会いと別れの喜びと哀しみも知り、果敢に自分の人生を切り開いてきたその軌跡は、あとに続く者に、大きな勇気と生きる指針を与え続けている。その足跡を、あとに続く者たちは受け継いでいくことを忘れてはならない。これまでの研究により、隔世の感のある中で、逆境を乗り越えて足跡を残した先達の人生観には、共通する要素があることが分かってきた。今後さらに分析を進め解明を試みたい。